



3カ月ぶりに会社へ姿をあらわした海外事業課長は、頭のとっぺんから導火線を生やしていた。彼は朝礼でフロアの職員たちに長期の欠勤を詫びた後、ゆっくりと頭を上げて、こう言った。

「私は改造手術を受けて人間ダイナマイトになりました。気持ちが昂るとこの導火線に火が点いて、たちまち爆発してしまいます。どうか皆さん、私をいじめないでください」

フロアの上司や部下たちがぽかんと口を開けて佇む中、彼は表情を変えずに自席に戻り、パソコンを立ち上げた。

「なんだったんだ、今の」

総務課の私は隣の席の同僚にささやきかけた。彼は首をかしげながら、左の人差し指をこめかみの横で2回くるくると回し、ぱっと手を開く仕草をした。

海外事業課は新しい部署だった。

いわゆる天下り企業である我が社は、景気の良い時代には既得権益だけで、これといった経営上の工夫もなく十分にやっていくことができた。次第に経済状況が悪くなり体質改善を叫ぶ人もちらほらいたが、具体的には誰も何もしなかった。

そうこうしているうちに、とある経済大国で投資銀行が破綻し世界的な金融危機が訪れた。鈍感な我が社の経営陣はその時点ではまだ「問題ない」とうそぶいていたが、これまで受けていた役所からの委託事業が減少し税制優遇もなくなると一転、「無駄をなくせ」「競争心を持って」と社員たちをあおりはじめた。

そのような時に就任した新しい社長は起業家的マインドを持つ元官僚で、この会社のお役所的な空気を大いに嘆いた。営利企業と同じかそれ以上の競争心をもって仕事にかからなければならないと説き、全社員を大会議室に集めて、世界的なIT企業の社長の言葉を引用しながら激励した。すなわち「ハングリーであれ」「バカであれ」と。彼は人事にも口を出し、自分が優秀だと評価した社員を動かしては、新たな収益部門を創設した。海外事業課はその際に生まれた。

この部署の使命は、東アジアの国々に対して新しいサービスを展開し、会社に多大な収益をもたらすことだった。リーダーを任された海外事業課長は、言われたことしかできない他の管理職たちに比べて、確かに仕事のできる人物だった。実直で勤勉、語学も堪能な彼は社長にすぐさま気に入られた。その部下となった2人もかねがね優秀という評価を受けていた社員で、当初は、少数精鋭の印象を与えるこの新しい部署に期待感を抱く者は少なくなかった。

だが、長年続いた企業風土を短期間に変革することは、結果的に言って不可能であった。

海外事業課長は部下と協力して地道に調査を重ね、いくつかの新サービスを企画して、それらを実行に移そうとした。全作業を3人で行うには限界があったため、課長は仕事を分解し、それぞれのノウハウを持つ部署に協力を要請した。しかし、各部署とも仕事量が増えることを嫌い、かと言ってはっきり断りもせず、引き受けた上でほとんど動かなかった。なぜ海外事業課だけで完結させないのかと裏で批判する管理職もいた。他力本願の精神が骨の髄までしみ込んでいた。

温厚な課長はそういう人々を咎めることも、無理やり動かすこともできなかった。優秀なことに違いはないが、こういう任務に向いている人材ではなかったと言える。そのため、課内の3人だけで多岐に渡る作業を抱え込まなければならなくなった。

やがて2人の部下は、身内に気を遣いすぎて強く出られない課長に不甲斐なさを感じ、徐々にやる気を失って最終的には、定時にさっさと引き上げるようになってしまった。課長はそれに対しても何も言えず、とうとうあらゆる瑣末な作業まで1人でやらなければならなくなった。せっかく考案した企画も思うように進めることができず、いっこうに成果は上がらない。彼は、残業につぐ残業で肉体を削り、期待外れだと言う周囲の陰口で精神をすり減らしていった。

そんな課長にとどめをさしたのは、他でもない、彼を抜擢した社長であった。

海外事業課が発足してから6か月後の経営会議で、社長は、パソコンにかじりついてばかりでまったく行動していないと課長を批判した。実際、課長は細かな作業に追われて行動できなかったのであるが、社長はその状況をまったく把握していなかった。彼の起業家マインドはほとんど口だけだった。新規の部署をつくったことで大改革を起こした気になり、持続的な収益事業の構築は自分の見込んだ人たちに丸投げしていた。そして、海外事業課長が思い描いていたスーパーマンでなかったことに一方的に憤りを感じ、会議の場で集中砲火を浴びせかけた。たっぷり2時間ねちねちと嫌味を垂れ流し続ける社長に対し、課長は顔を真っ青にしてうつむきながら、その侮辱に耐えていた。会議の後、総務課長は、さすがにあれは気の毒だったとこぼしていた。

その翌日から、海外事業課長は体調不良を理由に長期の休職に入った。

そういうわけで、誰もが皆彼はもう二度と入社することはないと思っていたから、今回の復活には心底驚いたのである。

しかも、冗談など言う人ではなかったのに、頭に妙なものをくっつけて人間ダイナマイトになったなどとわけの分からないことを言う。実に不気味だった。社員たちはできる限り彼と距離を置くことに努め、仕事上どうしても関わる必要があるときのみ、腫れものにさわるような態度で接した。

ひと月が経過し、海外事業課長復帰後初めての経営会議が開かれた。

会議室は最初から不穏な空気に包まれていた。だが、例の社長はそんな空気はものともせず、開口一番、課長に鋭い目を向けて、「ロングバケーションで大いにはじけることができたかね。ええ？ 爆弾男くん」と、先制攻撃を放った。

ところが、以前ならそれだけでしどろもどろになっていた海外事業課長は、顔色ひとつ変えず、毅然とした態度で上座の社長を見つめ返し、「ええ、おかげ様で」と平然と言ったのけた。

その言葉と表情と声との全てが、社長には気に食わなかった。彼は顔を真っ赤にして立ち上がり、この世のありとあらゆる罵詈雑言をマシンガンのように発射した。

ばか、あほ、まぬけ、くず、かす、どじ、無能、うじ虫、ごみ虫、くそ野郎、はえ野郎、ごくつぶし、甲斐性なし、恥知らず、恩知らず、xxx、xxxx、xxxxx.....

とてもエリート街道を突き進んできた人間が発するとは思えぬ言葉を、老人はとめどもなく吐き続けた。そのあり様は正視に堪えないものだったという。

誰も一言も口を聞くことができなかった。40代50代の男たちがひたすら下を向き、この災難が間違っても自分に飛び火しないことを祈ってグッと拳を握り締めていた。しかし当の海外事業課長は一切表情を変えことなく、まっすぐに前を見つめて、堂々と座っていた。

やがてさすがに喉を枯らした社長はようやくその口をつぐみ、せえせえと肩で息をしながら椅子に座りなおした。隣に座る専務がそっと飲み物を勧め、社長はカップの水を喉をならして飲み干した。社長が容器を置いたのとほぼ同時に、海外事業課長がすっと立ち上がった。そして社長の方をじっと見つめた。無表情だが、その顔はどこか哀しげに見えたという。

同時に、彼の頭の導火線の先っぽに、ぼっ、と炎が点った。

出口からもっとも近い席に座っていた総務課長はあっと短く叫ぶと、即座に身をひるがえして、部屋からの脱出を試みた。が、間に合わなかった。導火線は瞬く間に燃え尽き、炎が海外事業課長の頭頂部に到達した。

轟音が事務所全体に響き渡り、建物が縦横にぐらぐら揺れて、天井のほこりが舞い落ちた。会議室の窓ガラスは爆風で全て割れ、その床も崩れ落ちたが、幸い下の階は倉庫で、他の職員や来客にけがはなかった。

私たちにも爆発の原因ははっきりしていた。しばらくして数人で連れだって会議室の様子を見に行くと、凄惨な眺めが広がっていた。白い壁や天井にまで血がべっとりとこびりつき、床の穴から下の倉庫を覗き込むと、上司たちの肉片や内臓が、そこかしこに散らばっていた。唯一出口の近くに倒れていた総務課長だけが、身体を3分の1ほど吹き飛ばされながらもまだ意識を保っていて、経営会議の最後の様子を伝えた。彼はそのまましばらくうめいていたが、結局救急車の到着を待たずに息を引き取った。

事件の数週間後、役所からすぐに代わりの社長、専務、部長たちが天下り、しかるべき席に座った。新しい社長は少し細かいことにうるさいが、基本的に可もなく不可もない人畜無害な人物だった。

こうして私たちは、また以前のように何も考えず穏やかな心で仕事ができると、ほっと胸をなでおろしたのだった。

(了)

ボンバーマン

<http://p.booklog.jp/book/79926>

著者：小田原がろ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/gallo-od/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/79926>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/79926>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ